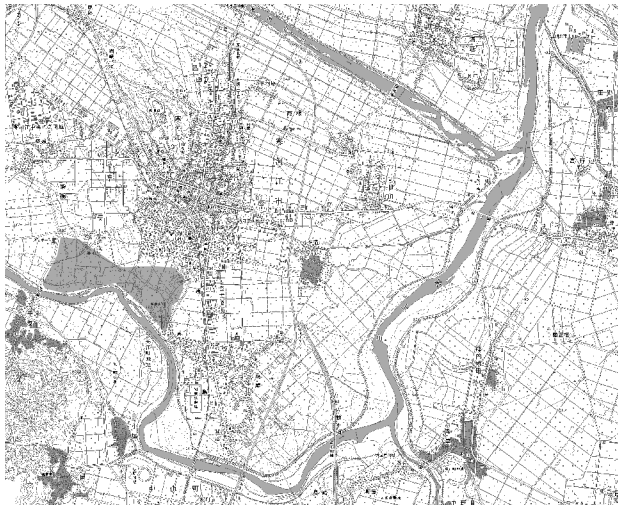


たかせやま 高瀬山遺跡 (H O) 3 期

遺 跡 番 号 430
調 査 次 数 第 2 次
所 在 地 寒河江市大字寒河江字高瀬山
北緯・東経 38 度 21 分 44 秒・140 度 16 分 8 秒
調査委託者 山形県村山総合支庁建設部西村山道路計画課
調 査 原 因 最上川ふるさと総合公園都市公園整備事業
調 査 面 積 780 m²
現 地 調 査 平成 21 年 5 月 12 日～7 月 15 日
調査担当者 今正幸 (調査主任)・高橋一彦
調 査 協 力 寒河江市教育委員会・山形県教育庁村山教育事務所
遺 跡 種 別 集落跡・古墳
時 代 縄文・古墳・奈良・平安時代
遺 構 竪穴住居跡・複式炉跡・墓坑 (土器埋設遺構)・土坑・柱穴・溝跡
遺 物 縄文土器・土師器・赤焼土器・土製品・石器・石製品
(文化財認定箱数: 192 箱)



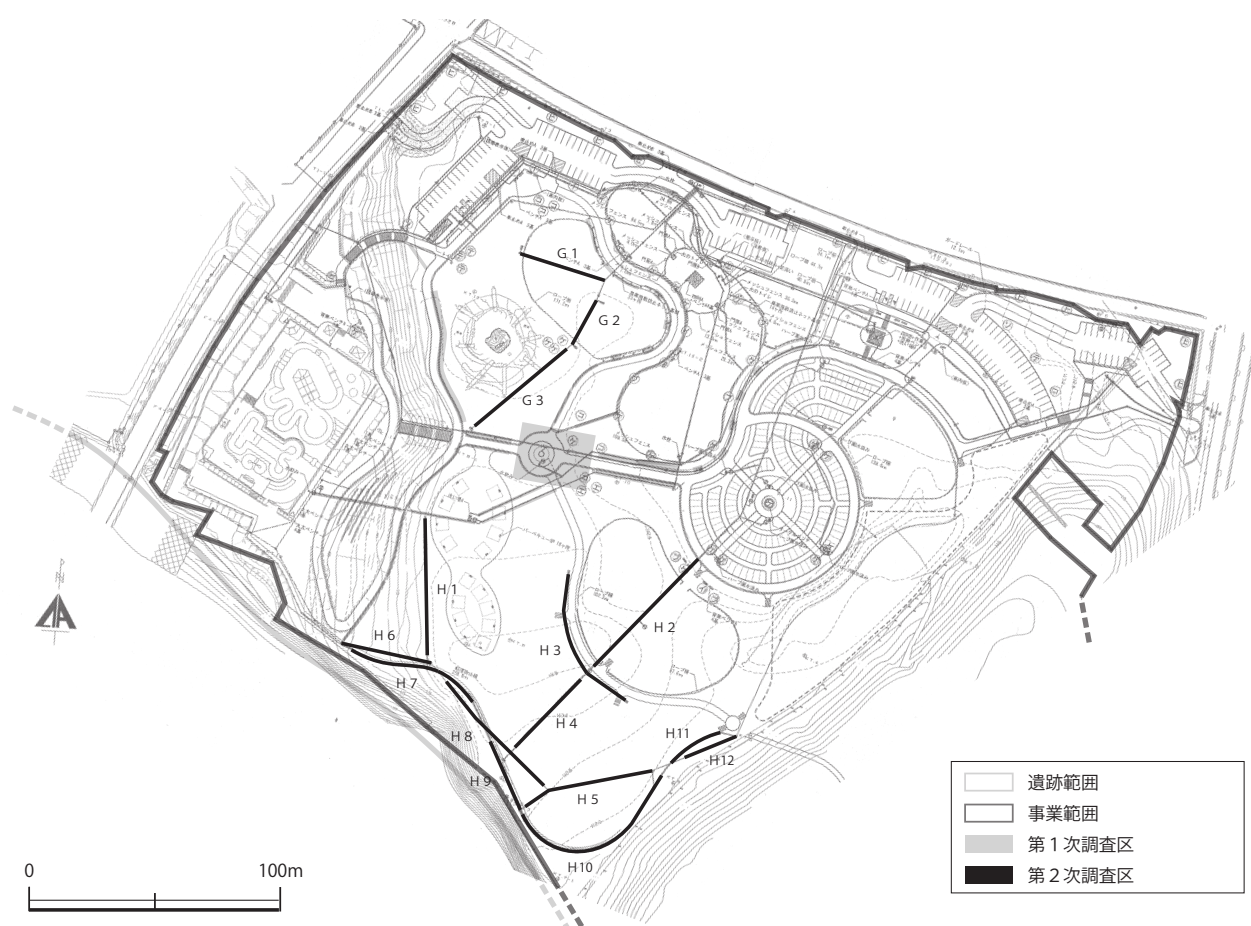
調査の概要

高瀬山遺跡は、寒河江市街の南西、遺跡の南に沿って流れる最上川に至る東西約 1.6km の範囲に位置する。旧石器時代～中世にわたる複合遺跡で、県内でも有数の規模を誇っている。周辺は果樹園や畑として利用されてきたが、近年の開発によって現況は大きく変貌しつつある。当センターでは、高速道路建設に係る 1 期・2 期・S A (サービスエリア地区)、公園造成に係る H O (旧称ハイウェイ・オアシス地区) 1 期・2 期の発掘調査を実施してきた。

今回は、最上川ふるさと総合公園都市公園整備事業に係る高瀬山遺跡 (H O) 3 期の発掘調査となる。調査区は、遺跡の南東端にあたる比高差 20 ～ 30 m ほどの小丘陵「高瀬山」の西麓、最上川左岸の中位段丘に立地する。また、区域内には、県指定史跡「高瀬山古墳」が所在する。調査は、給排水・電気・フェンスなど公園設備の埋設工事に沿った幅 1 ～ 2 m ほどの線掘り (トレンチ調査) が中心で、住居跡など大型遺構の検出や遺跡の全容を捉えることは困難であった。

昨年度の第 1 次調査では 1,500 m² の調査を実施し、縄文時代中期の埋設土器や奈良・平安時代の竪穴住居跡 (方形プランの角部分) とカマド跡とみられる焼土を検出した。また、高瀬山古墳の周辺において、カーブを描く溝跡が複数確認されたが、高瀬山古墳群に関連する周溝の一部である可能性も否定できない。

今年度は昨年度に引き続く第 2 次調査で、780 m² の面積について調査を行った。調査区は、高瀬山古墳の周辺を G 区、最上川に面する段丘崖 (斜面) と高瀬山西麓の段丘面 (平坦面) を H 区とし、計 15 本のトレンチを設定した。なお、H 9・10 トレンチについては、遺物包含層の掘下げまでで調査を終了した。それ以降の遺構



調査区概要図 (S=1:3,000)

検出・精査などは行わず、工事の一部中止や盛土による工法変更で対応することとなった。

遺構と遺物

今回の調査は1次調査の約半分ほどの規模となったが、出土遺物は整理箱にして192箱、検出遺構は登録数で300基を超える成果が得られた。以下に、主な遺構・遺物と調査区ごとの概要について説明する。

高瀬山古墳周辺のG区では、果樹園内にあるG1・2トレンチの遺構は希薄であったが、G2トレンチにおいて幅5mを超える大型の落ち込み(SX 203)を検出した。これが古墳の周溝となるようなものかどうか、関連する遺物の出土はなく判然としない。また、G3トレンチの壁際で、縄文時代の埋設土器(EU 211)を検出した。土器埋設遺構の断面観察から、表土のわずか15～20cm下から縄文時代の遺物包含層が攪乱を受けず、良好に保存されている状況が確認された。

最上川に面するH区の段丘斜面では、主に奈良・平安時代の遺構・遺物が確認されている。斜面上に位置するH6・7トレンチの遺構は希薄であったが、段丘上端に

あたるH1トレンチでは奈良・平安時代の竪穴住居跡2棟(ST 238・240)を検出した。床面には貼床が認められ、カマド跡とみられる焼土部分からは赤焼土器の甕が出土している。昨年度の1次調査においても、斜面下方で当該期に属する竪穴住居跡を検出している。住居跡に近接するH6トレンチでは、大型の袋状土坑(SK 220)が検出されているが、覆土の土色・土質などから比較的新しい時代に属するものと判断され、これらの住居跡に付随する貯蔵穴であった可能性が考えられる。



最上川に面する段丘斜面

高瀬山の西麓、H区の段丘平坦面では、多量の縄文土器片・フレイクを出土する厚さ約30～50cmの遺物包含層が検出された。遺物包含層の範囲はH区の約1/4にあたる面積を占め、出土遺物は全出土量192箱のうち、126箱にも達する。これらの区域では、縄文時代中期末葉～後期前葉を中心とする遺構・遺物が密集し、今回の調査の主体を成している。

遺構の分布は、H4・5・7・8トレンチの段丘縁辺部において顕著であり、H区北東部の果樹園・雑木林内にあるH2・11・12トレンチでは希薄であった。H5トレンチの東半部では、良好な遺物包含層を確認したものの、遺構はほとんど検出されていない。この区域では、遺構検出面とした地山までの堆積が厚く、遺構は検出面よりも、さらに上層に存在した可能性が高い。当該期の主要な遺構は、そのほとんどがH7トレンチの段丘平坦面とその周辺に集中している。最上川に浸食された急峻な段丘崖に接するように立地するが、当該期における段丘面（生活面）は、あるいは、さらに河川側に広がっていた可能性も示唆される。H5・7トレンチでは、埋設土器と石組の2つの部分からなる、当該期に特徴的な複式炉の一部（E L 247・499 E U 262）を検出した。竪穴住居跡については、調査の性格上、平面プラン全体を検出することは難しかったため、炉・カマド跡や貼床などの検出を以て住居跡と判断した。しかし、劣化の著しい礫石や多量のフレイクを出土したH1トレンチのS X 241、焼土が散在するH8トレンチのS X 288など、住居跡の可能性のある遺構は、これ以外にも存在する。H7トレンチでは、これらの住居跡に付随するかのよう
に、葬送や祭祀に関わる遺構も検出されている。土器埋設遺構（E U 244）は幼児を埋葬した墓坑と考えられるが、埋甕の上部に板状の蓋石^{ふたいし}を伴うもの（E U 269）も確認された。また、袋状土坑（S K 254）の底面から、折損した石棒と石皿がセットで出土している。石棒と石皿の共伴事例は比較的多く、石棒は男性、石皿は女性を象徴するものと考えられる。覆土からは焼土も検出されており、祭祀的な性格を持つ遺構である可能性が高い。なお、付近には、地面に立てるように埋設されていた柱状の立石遺構（S P 265）もある。H8トレンチの袋状土坑3基（S K 302・304・329）では、数個体の土器や焼土が覆土内に積み重なった状況で検出されて

おり、数度にわたる廃棄行為が行われていたとみられる。H3トレンチ北半部の袋状土坑2基（S K 355・364）からも、土器が数個体まとまって出土しているが、これらは縄文時代中期初頭に属するもので、その時期や位置的にみても、他の遺構とはやや隔絶された印象を受ける。

出土遺物については、縄文土器が主体を占めるが、竪穴住居跡（S T 242）から出土した器高4cmほどのミニチュア土器や土製品の耳飾などが特筆される。なお、縄文時代後期前葉の土器には、在地とは系統の異なるものが見られ、高瀬山西麓に接するH10トレンチの遺物包含層で一括出土している。石器には、定形器種として
せきぞく いしさじ いしべら だせいせきふ ませい
石鏃・石匙・石篋・打製石斧・磨製石斧・石皿・凹石・
たたきいし せきぼう
敲石、石棒の一部とみられる石製品などがある。特に石皿や凹石など礫石器の出土が顕著であった。

まとめ

今回の調査によって、高瀬山西麓の中位段丘面において、縄文時代中期末葉～後期前葉（約4000年前）の大規模な集落跡の存在が明らかになってきた。当該期に特徴的な複式炉を有する竪穴住居跡をはじめ、貯蔵や廃棄、一部に祭祀的な利用も考えられる袋状土坑、墓坑といった遺構群は集落を構成する要素となっている。遺物に関しても、多量の土器片・フレイクを出土する遺物包含層の存在とともに、食料の加工・調理に用いる石皿や凹石などが石器組成で多くみられることは、高瀬山や最上川を背景とする恵まれた環境のもとで、遺跡が生活の場として営まれてきたであろうことを物語っている。

昨年度の1次調査の成果と合わせて、今後の整理作業において、遺物の年代や遺跡の性格などについて、さらに詳しく検討していきたい。



H7トレンチ調査風景



S X 203 周溝? 検出状況



H 10 トレンチ遺物包含層出土の縄文土器



S T 240 カマド跡出土の赤焼土器



E U 269 出土の埋甕・蓋石



E U 262 埋設土器・焼土検出状況



E L 499 複式炉・焼土検出状況



土製耳飾と打製・磨製石器



礫石器 (石皿)



礫石器 (凹石)